

第 82 回日本放射線技術学会総会学術大会 印象記

野坂 広樹
Nosaka Hiroki

1. はじめに

2026 年 4 月 16～19 日までの 4 日間、横浜のパシフィコ横浜にて、第 82 回日本放射線技術学会(JSRT)総会学術大会が開催されました。本大会は第 85 回日本医学放射線学会(JRS)総会、第 131 回日本医学物理学会(JSMP)学術大会、及び日本画像医療システム工業会(JIRA)の国際医用画像総合展(ITEM 2026)との合同で、日本ラジオロジー協会(JRC)主催で JRC2026 として開催されました(写真 1)。JRC2026 では、開催テーマとして「Radiology Connectome」が掲げられ、放射線医学を中心に、臨床現場、医療スタッフ、最先端の科学技術、それぞれの進化、そして世界へと広がるそれらの多様な「つながり」を強化し、新たな価値を創造するという強い意志が込められているものです。大会全体を通じてこの理念を体感できるよう、多角的かつ彩り豊かなプログラムが随所に企画されていました。国内最大規模の放射線医学の祭典であり、多くのプログラムで活発な議論が交わされていました。本稿では、数あるプログラムの中から特に印象に残ったいくつかのトピックに絞ってご報告させていただきます。

2. 本大会に参加して

近年、医療業界における AI の進歩は目覚ましく、最近では日常のあらゆる場面で AI の活用が話題に上るようになっていきます。数年前までは「AI に何ができるか」という可能性の議論が中心でしたが、現在では「いかに臨床実装し、信頼性を担保するか」という実用化のフェーズへと完全に移行しているように思います。そのような背景の中、合同シンポジウムとして開催された AI コンペ「AI Challenge in



写真 1 会場にて

JRC2026」は、今大会で最も熱を帯びた企画の 1 つでした。今回の課題は「胸部 X 線画像における心臓領域のセグメンテーション」であり、筆者らのグループも満を持して参加しました。惜しくも受賞は逃したものの、驚くべきはその参加数です。全 53 グループものエントリーがあり、AI 分野に対する関心の高さと発展の速さを肌で感じる結果となりました。この熱量は、単なる技術開発の段階を超え、多くの研究者が「日常的なツール」として AI を使いこなしている現状を如実に物語っていました。

JSRT シンポジウム 1「放射線技術学における異分野融合型研究の展開」では、これからの学術活動のあり方について深い示唆を得ることができました。学会の醍醐味は、自身の専門領域の知見を深めるだけでなく、空いた時間に他分野のセッションを聴講し、放射線医学全体の潮流を知ることにあります。本シンポジウムでは、民間企業人、臨床の診療放射線技師、大学の研究者等、異なるバックグラウンドを持つ専門家が連携した研究が多数紹介されていま

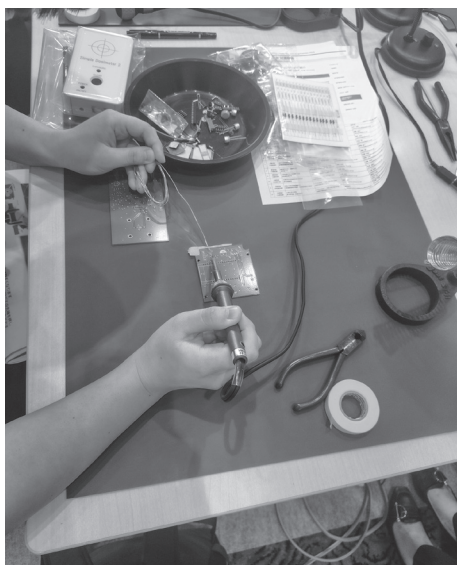


写真2 ハンズオンセミナーの“ハンダごて”

した。特に印象深かったのは、「連携」と「融合」の違いに関する議論です。従来の「連携」が個々の専門性を保ったまま協力することをさすのに対し、異分野における「融合」は化学反応のように専門性を超えて混ざり合い、全く新しい価値を創出することをさします。これは、JRC2026のテーマである「Connectome」を学術的に具現化する試みに他なりません。専門領域の殻に閉じこもることなく、異なる視点が混ざり合うことで生まれるイノベーションの可能性に、大きな期待を抱かせる内容でした。この議論は、今後の私たちの研究姿勢を根本から見直す契機となるだろうと感じました。

今大会では実技を伴うハンズオンセミナーも充実しており、期間中にJSRTとJRSの企画を合わせて合計5つのセミナーが開催されました。筆者は「JSRT企画1：簡易線量計作成セミナー」に本学の学生と共に参加しました。このセミナーは定員の2倍以上の応募があったとのことで、その人気の高さから、実際に手を動かして学びたいという参加者の意欲がうかがえました。近年、AIやシミュレーション技術の向上により、PC上での解析が主流となっていますが、物理的な現象の根幹を理解するためには、実際に検出器を組み立て、信号を可視化するプロセスが欠かせません。自ら“ハンダごて”を手に、試行錯誤しながら回路を構成していく姿は、技術者としての原点を思い出させるものとなりました（写真2）。

また、展示ホールで開催されたITEM（国際医用

画像総合展）についても触れておきたいと思います。最新のフォトンカウンティングCTや、ディープラーニングを駆使した画像再構成等、ハードウェアやソフトウェアの進化も目覚ましいものがありました。しかし、それ以上に注目すべきは、各メーカーが提示する「ワークフローの最適化」という視点です。検査予約から撮影、読影支援、レポート作成に至るまで、医療スタッフの負担を軽減しつつ、患者への提供価値を最大化するソリューションが並んでおり、医療技術が社会実装される際の出口戦略を強く意識させられました。

3. 最後に

筆者がJRCに参加しはじめて10年以上が経過しますが、これまでは自身の専門領域である核医学や画像解析のセッションに集中することが常でした。しかし、今回の大会が掲げた「Radiology Connectome」という概念に触発され、あえて自分の専門から少し離れた領域に足を踏み入れてみました。その象徴的な出来事として、実は初めて「マリンロビー」へ足を運び、不覚にも道に迷うという経験をしました。広大なパシフィコ横浜の構造は、さながら現代の放射線医学が内包する複雑さと多様なつながりを象徴しているようでもありました。専門性を突き詰めることはもちろん重要ですが、アンテナを広く張り、学会という場をより多角的に楽しむ心の余裕を持つことの大切さを、この迷子という経験が教えてくれたように思います。自分が知っていると思っていた領域の外側に、これほどまでに豊かな知の海が広がっていることを再認識できたのは、本大会最大の収穫となりました。

今回得られた知見、そして会場で交わした熱い議論の数々は、明日からの研究や臨床、教育現場における大きな原動力となると確信しています。特に学生たちにとっては、最先端の技術に触れるだけでなく、異なる背景を持つ専門家同士が「Connectome（つながり）」を構築し、真摯に議論を戦わせる姿を目の当たりにしたことが、何よりの教育になったと信じています。このような貴重な学びと刺激の機会を与えてくださった大会関係者の皆さま、そして切磋琢磨し合える仲間たちに、心より感謝を申し上げます。

（茨城県立医療大学）